

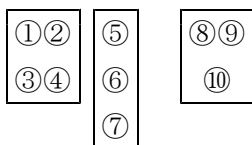
表音文字の配列

中村雅之

1. 直進配列と蛇行配列

表音文字は多くの場合、直線的(linear)に読み進むという性質を有している。すなわち、ラテン文字のように左から右へ、あるいはアラビア文字のように右から左へ、さらには満洲文字のように上から下へと、一定の方向に読み進むのである。古代のギリシア語などにおける牛耕式(boustrophedon)のように、行ごとに左から右へ、右から左へと交互に方向が変わるものもあるが、その直進的な性質に違いはない。

しかし、必ずしも直進配列を取らない表音文字も少なからず存在する。現在使用されている文字で我々になじみ深いものとしては、ハングルがある。例えば「読んだ本」を意味する「읽은 책('irg-'yn caig)」は次のような配列になる。



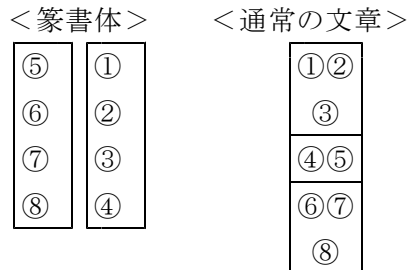
全体を現在一般的な左から右への横書きとして見れば、②から③への部分は僅かではあるが逆方向に戻る形になる。これは本来縦書きであったものを横書きにしたために生じた現象であるが、表音文字の配列としては異例と言える。本来の縦書きとして見た場合、各々の要素は蛇行しながら上から下へと進む。その際、行は右から左へ進むにもかかわらず、表音要素の単位では左から右へ進む部分が随所に含まれている。表音文字としては最も若い文字とも言えるハングルにおいて、このような非合理的な配列がいかんして採用されたかについての詳細は不明である。

以下には、契丹小字とパスパ文字の例を検討して、文字要素の配列とそれに関連する問題を考えてみたい。

2. 契丹小字の場合

ハングル同様に蛇行配列を示すものに、契丹小字がある。19世紀までのハングルと同様に、各行は縦書きで、全体は右から左へと進むが、各字の内部では表音要素を左右に配置して「左→右」と進む。ところが、このような通常の表記と

は別に、碑文の篆書体部分(篆蓋)の契丹小字では直進配列による表記がなされていたことが知られている。つまり、通常の文章では蛇行配列による表記がなされ、篆書体では全く同じ文字要素を直進配列としているのである。



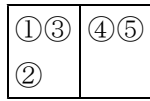
これについて西田龍雄氏は、「篆蓋の文字のように字母を一字一字たて書きにすることは、ウイグル文字を学んで作ったという記録と合い、それを漢字の偏旁に似せて組み合わせ方法は、漢字の構成を模倣したことを如実に示している」という(『漢字文明圏の思考地図』p.128)。つまり、契丹小字がウイグル文字を参考にして作ったという『遼史』の記録と、篆書体の直進配列を関連づけた訳である。

このように、契丹小字の作成草案の段階では、ウイグル文字と同じような直進配列であった可能性が高い。すでに出来ていた契丹大字が、文字要素そのものとともに配列(右から左への縦書き)をも漢字に倣っていたため、小字の配列も漢字風に修正したのであろう。その際、右から左への縦書きという全体の方向のみならず、各字の内部の構成においても「左→右→下」というような漢字の偏旁の配列を参考にした。つまり、はじめ直進配列のウイグル文字をヒントとして表音化に成功した契丹小字は、漢字の影響を受けて蛇行配列に修正した。結果として、表音文字と表意文字という原理の違いを超えて、契丹小字と漢字とは非常によく似た配列になったのである。

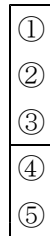
3. パスパ文字の場合、

契丹小字とは逆に、素材の段階では蛇行配列であったものをウイグル式の直進配列に修正した例として、パспа文字がある。パспа文字は字形に関してはほぼチベット文字の変形と言いつるが、その配列はチベット文字とは異なり、むしろウイグル文字の影響を示している。チベット文字は左から右への横書きであるが、縦方向にも複数の要素を重ねる蛇行配列である。しかし、パспа文字は左から右への縦書きであり、かつ直進配列である。単純な例としては、二音節の語が次のような配置になることがあり得る。

<チベット文字>



<パスパ文字>



パスパ文字の字形が一部分を除いてチベット文字に由来することは一目瞭然であるが、その配列はチベット文字には従わず、ウイグル文字に倣っている。パスパ文字が表記すべき言語の第一がモンゴル語である以上、モンゴル人たちの間にすでに浸透していたウイグル文字の配列を採用するのは自然なことであつたと考えられる。

3. 文字の重層的特質

契丹小字とパスパ文字の表記法には重層的あるいは複合的な特質のあることが確認できる。主な特徴は以下のとおり。

	<契丹小字>	<パスパ文字>
原理	表音(ウイグル文字から)	表音(チベット文字から)
字形	漢字を参考?	チベット文字から
配列	蛇行配列(漢字から)	直進配列(ウイグル文字から)
書体	漢字風・篆書あり	漢字風の方形・篆書あり

原理に関して少し補足しておく。契丹小字がウイグル文字を参考にして表音原理を獲得したことは『遼史』の記載からも想像されるが、実際の運用を見てもその点は確認できる。ウイグル文字は原則として単音文字であるが、母音に関しては表記原則が一定していない。ある場合には表記され、ある場合にはされない。しかし漢字音表記に関しては原則として母音を必ず表記している。固有のウイグル語では母音が十分に表記されず、漢字音では念入りに表記するという方法は、契丹小字においても受け継がれている。つまり、固有の契丹語表記では母音は必ずしも全て表記されないが、漢字音に関しては原則として表記している。このような表記法も、ウイグル文字に倣ったと言いうるであろう。パスパ文字については、母音/aを表記しないなどチベット文字の表音原理を採用したと見なして問題ない。

このように、契丹小字とパスパ文字がその原理をそれぞれウイグル文字とチ

ベット文字から得たことは疑いないのであるが、結果として出来上がった文字組織は元のものとはだいぶ異なったものになっている。新たな文字組織が形成される際には、漢字やウイグル文字のような影響力の大きな文字組織によって、強大な磁力に引きつけられるかのように、模倣を余儀なくされるのかも知れない。

冒頭に言及したハンゲルの奇妙な配列も、漢字の影響を考慮すれば納得できよう。かつて西田龍雄氏はハンゲルの文字配列には契丹小字の影響があると唱えたが、むしろ双方共に漢字の影響を受けたと考えるべきではなかろうか。また、いくつかの字形の類似を根拠に、ハンゲルの作成にパスパ文字が関与しているという説が古くからあるが、表音原理(/a/の表記など)や配列の違いを無視して、必要以上にパスパ文字との関連を主張するのはあまり生産的とは言えない。契丹小字やパスパ文字で見たように、重層的な特質をいかにして解きほぐしてゆくかという点にこそ、文字研究の基本的なスタンスを置くべきであろう。